

## 第IV章 非行と自己像



### 1. 非行耐性をめぐって

以上のように、現代の中学生たちが大なり小なり、社会的ルールからはみ出した行動を日常化させ、また、何がしてよいことで何がしては悪いことなのか、という判断にも、これまたおとなとたぶんにズレを生じてきている様子を見てきた。

考えてみると、かつてと比べて、われわれの社会全体は、著しく非行へ傾斜した文化を生み出しており、その中に生まれ育った中学生たちは、時代の申し子として十分にその文化を吸収して育ってきている。かつて学校は、汚染された一般社会から隔絶された聖域であったが、このデータで見ると、学校はもはや聖域ではなくなってしまったかのようであ

る。学校は日常的に逸脱行動がくり返されている場であり、それに直接参加しないまでも、多くの生徒たちはそれに慣れ親しんできている。失われたパラダイスを復興させようとして、学校側は、生徒規則の徹底をはじめとして、懸命の努力を続けている。しかし、すべての行動の基になる「規範感覚」がくずれてしまっている彼らには、こうした学校側の努力もむなしただけだろう。今日のようにただひたすら生徒指導を強化して、事の処理にあたらうとするやり方では、早晚方法の転換を迫られるのではなかろうか。

さてこうした状況の下で、生徒たちは自身自身の非行性について、どのような判断を示

しているのだろうか。規範感覚がおとなのわれわれとズレてきている彼らであるから、現在自分たちがしているかすかすの逸脱行動についても、むろんあたり前のこととみなしており、非行とも非行につながる行為としての意識も、薄いと思われる。しかしそうした状況の下で、自分たちの将来像として、より重大な非行の可能性については、どう考えているのだろうか。換言すれば自分の内にある「非行耐性」とでもよぶべき力を、どのくらい信頼しているのか、その自己像の一部を次に明らかにしたいと考える。

図10は、生徒たちに「これから先何かあったら、あなたはひょっとすると非行をやるかもしれないと思いますか。それともどんなことがあっても自分は、絶対にそうならないと思いますか」とたずねた結果である。

親もしくは教師としては、「絶対に自分はそうはならない（非行をしない）」と言い切るだけの自信のほどを、生徒たち全員に期待したいところだが、その期待に答えてくれるのはわずか3分の1。「たぶん非行化しない」までを含めると3分の2にはなるものの、これではおとなであるわれわれは、正直言って不満である。自分の「非行耐性」に、自信のない者たちが3分の1とは、決して少ない数字ではないように思われる。しかも数字は1.5%だが、「自分はすでに非行化してしまった」と答えている者たちもいる。1学年を400人とすると6人の勘定だ。この自己評価は、実態に見合っている数字だろうか。

（以下は、「絶対またはたぶん自分は非行化しない」とした者を「非行耐性」についての「自己信頼群」、「可能性は半分半分、ひょっとしたら非行化するかもしれない」とした者を「中間群」、「たぶん非行化する、現在非行化してしまっている」を「自己不信群」と名づけて、考察をすすめよう）

さて次に問題にしたいのは、これらの非行耐性についての自己評価がどんな層でどのように行われているかである。まず学年との関連だが、巻末の集計表に掲げたように、「絶

対」「たぶん」非行化しないだろうとする者は、1年生から3年生にかけて、69%、64%、62%と僅少だが減っている。

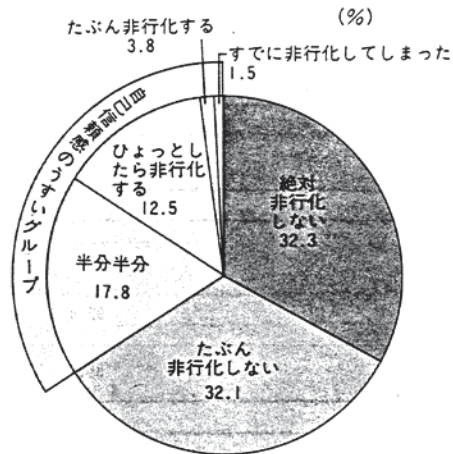
次に成績との関連だが、図11に示したように、全体を自己信頼群(64.4%)と中間群(30.3%)、自己不信群(すでに非行化したと答えている者を含む)(5.3%)とに分けて、それぞれのグループの学業成績レベルを見よう。どの層にも成績のよい者と悪い者はいるが、自己信頼群から中間群、自己不信群へと移るにしたがって、予想されたように、成績の悪い者の割合が増えていく様子が見られる。

次にこれら3群が、それぞれどのくらい逸脱行動をしているかを見たのが、図12である。どの行為においても、例外なく、自己信頼群は逸脱経験が少なく、次いで中間群、いちばん逸脱経験をもっているのは、やはり自己不信群という結果である。すなわち自己の非行性の予測は、かなりの程度現在の規範逸脱度に基いて客観的に行われている感じである。とくに「放置自転車遊ぶ」「校舎破壊」「なんば」「喫煙」「怠休」「万引き」「外泊」「夜遊び」「飲酒」「授業妨害」「教師への反抗」「喫茶店への出入り」については、自己不信群が他の2群をひき離れた経験回数をもっていることがわかる。

またすでに第III章で見てきたように、規範感覚のくずれと逸脱行為の実行率とは深いかわりがある様子だが、似たような結果は、図13にも見いだされる。中間群を除いて、自己信頼群と自己不信群とを比較すると、すべての項目において、自己不信群には大きな規範感覚のくずれがある。例えば中学生がマニキュアすることについて、これを「悪くない」とする者は、自己信頼群ではわずか25%だが、自己不信群では64%もの者が「悪くない」としている。またバスや電車で子ども料金を乗る行為も「悪くない」とする者は、前者が30%に対して後者は54%と、大きな開きがある。

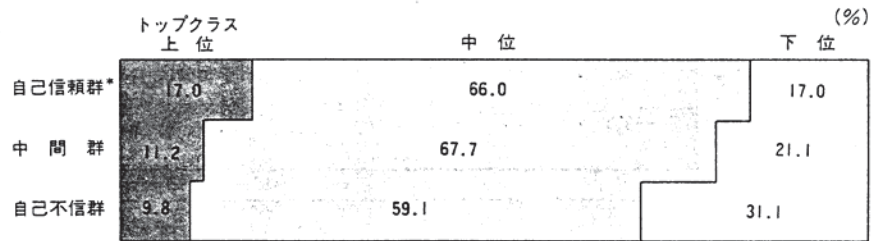
(図10) 非行耐性 ~何かあったら非行化するか~

→ 3分の1は自信がない



(図11) 非行耐性×成績

→ 成績が悪くなるほど自己信頼も低下

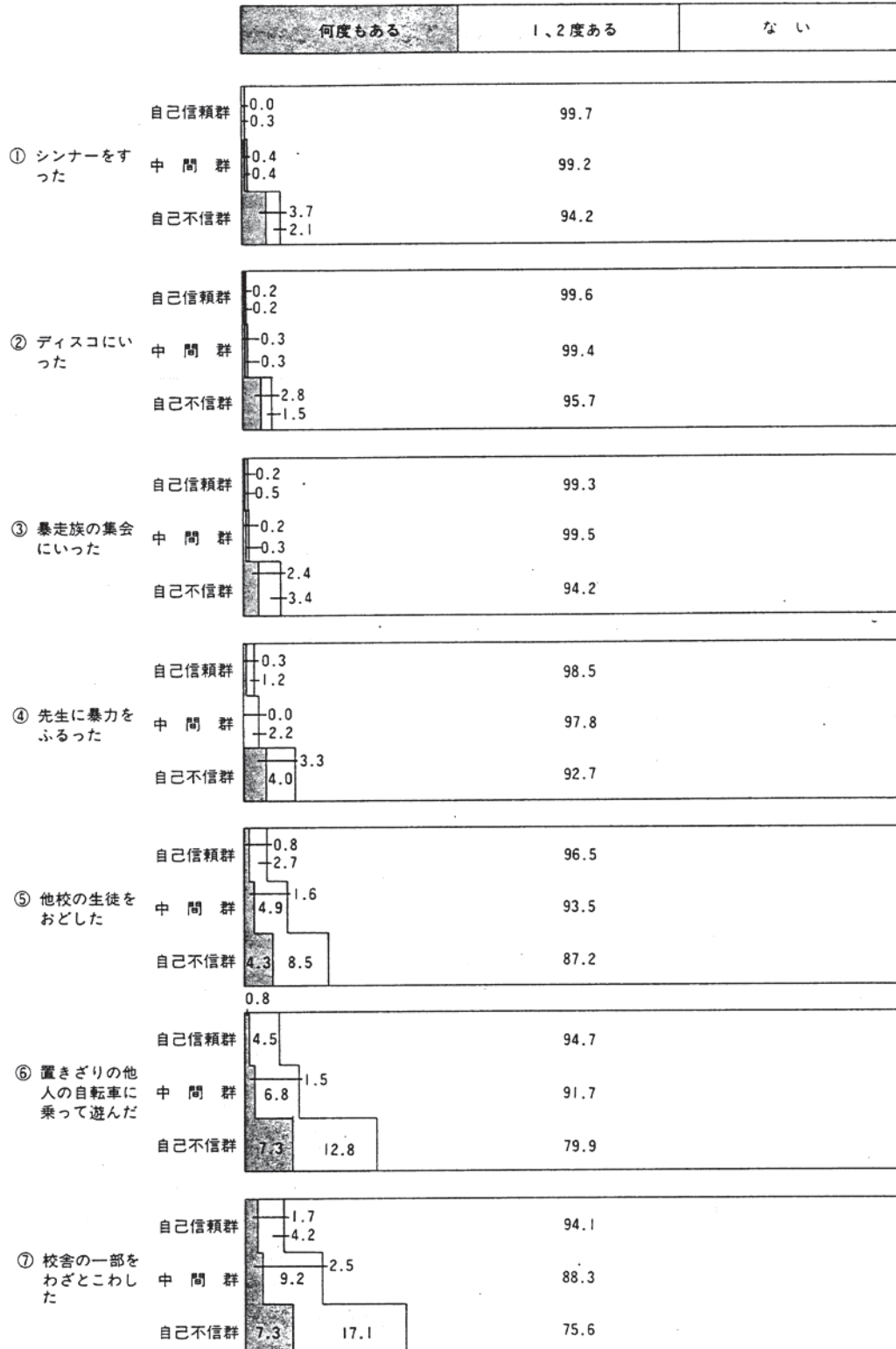


\* 自己信頼群 (絶対、たぶん非行化しない)  
 中間群 (半分半分、ひょっとしたら非行化する)  
 自己不信群 (たぶん非行化する、もう非行化してしまった)

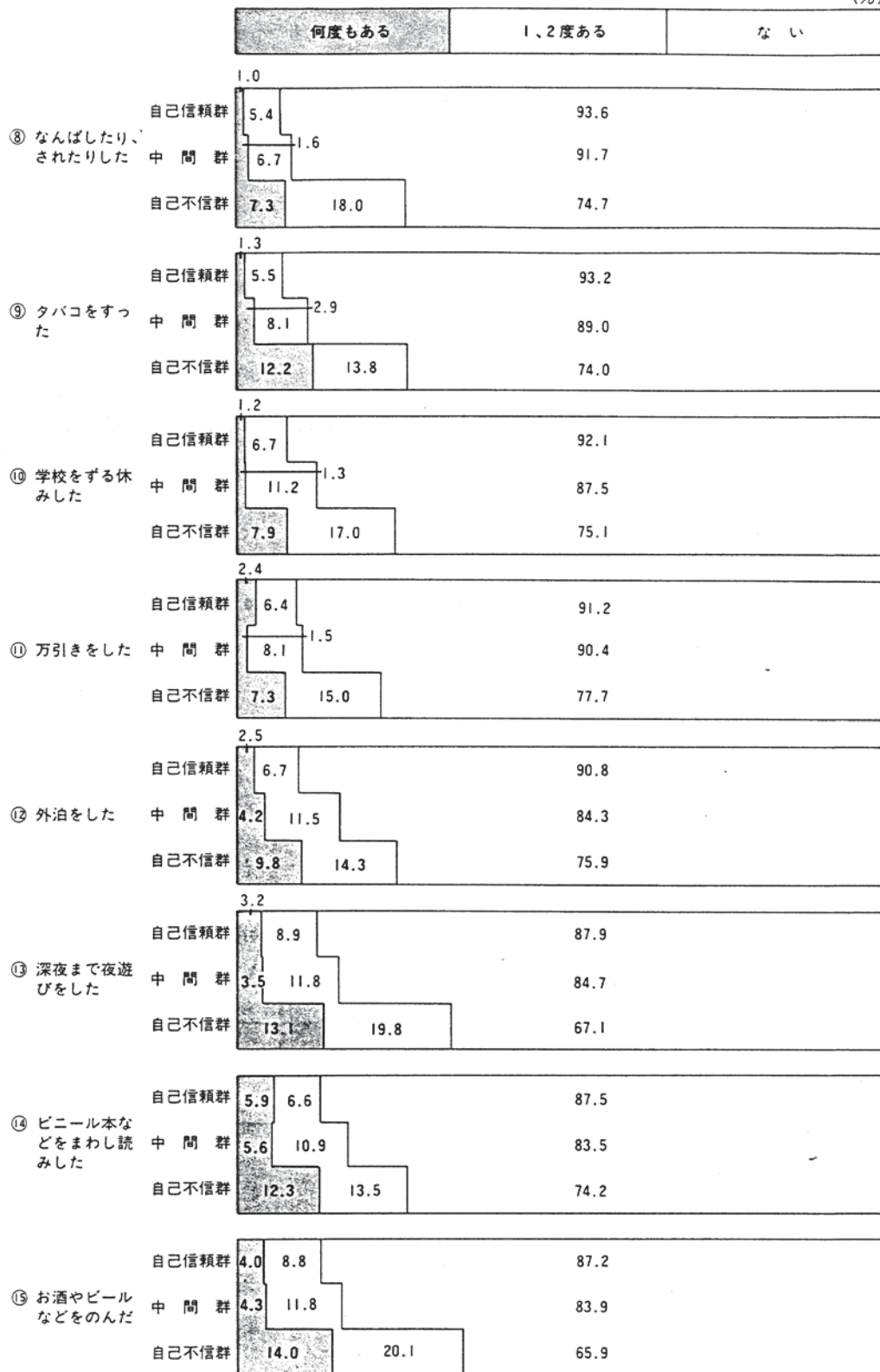
(図12) 非行耐性×逸脱経験 (グループでの)

→ 自己不信群は逸脱経験も多い

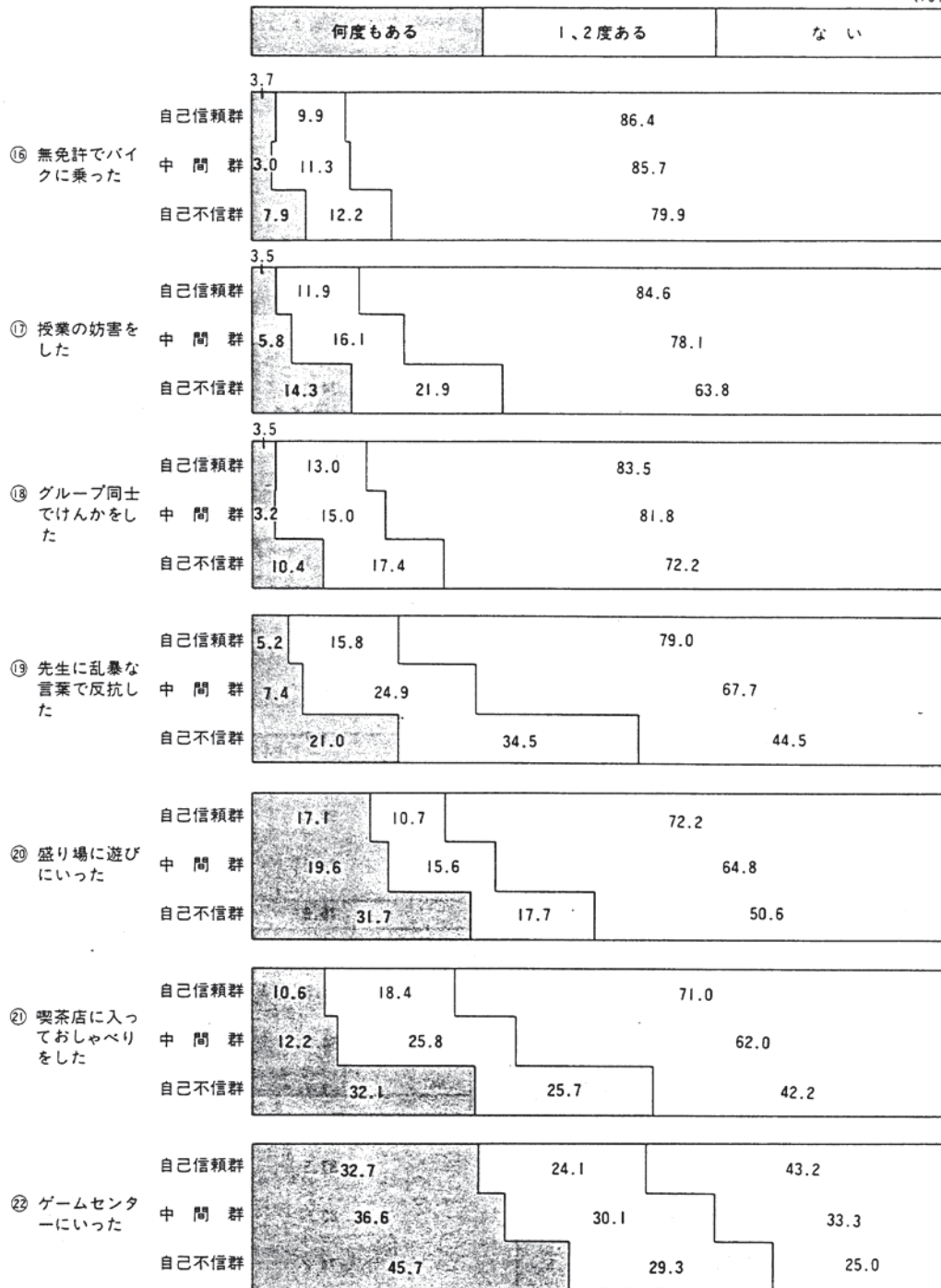
(%)



(%)

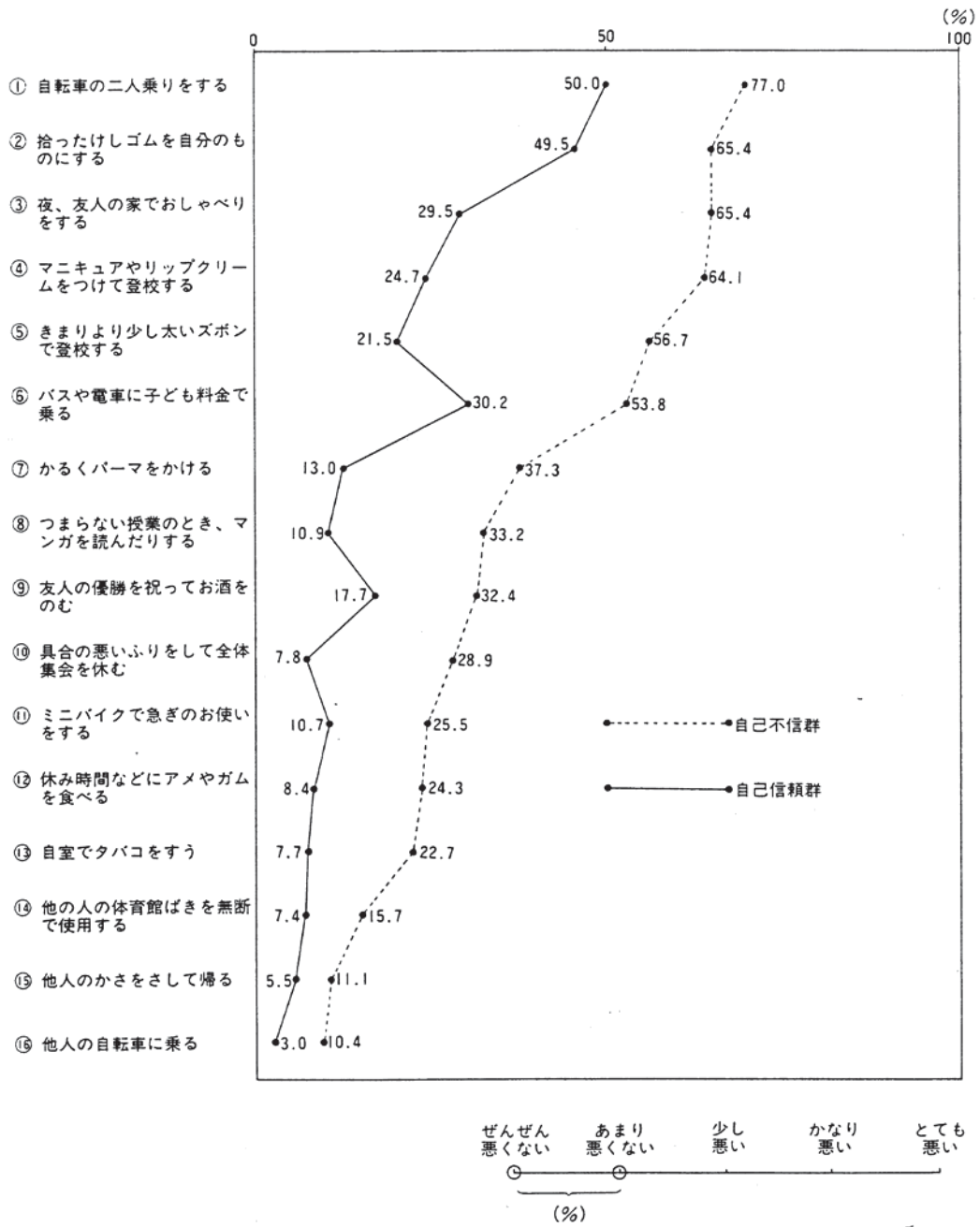


(%)



(図13) 非行耐性×規範感覚

→ 密接な関係



## 2. 非行防止への3つの接近

以上のように「逸脱行動」と「規範感覚」と「自己像」との間には、密接な関連がありそうだ。これらはどれが原因でどれが結果というのではなく、三者が密接に関連し合い互いに相乗作用を果たしているとも考えられる。

こうした結果から、中学生たちに非行を行わせないように方策を考えてみると、この3つのいずれかの部分に接近して、いわば「悪い鎖」の一部を切ってしまう方法が考えられるだろう。例えば(1)逸脱行動そのものを、社会的しめつけ（禁止や罰則の強化）によって不可能にしてしまう方法があり、(2)幼児期からのしつけの強化等によって、規範感覚そのものを十分に形成させる方法も考えられる。また(3)自己像そのものを十分健康なものにしておいて、そうした「よき自分」という自己像の維持に障害となるような行為（例えば非行）に対して、自己規制力が働くようにする方法も考えられる。

このうち(1)のしめつけ方式は、速効的な方法で、ときにはこれにとりあえず期待しなければならぬ場合もあるだろうが、抜本的な問題解決には至らないのが、難点であろう。しめつけがゆるめば、直ちに元へ戻る可能性

が十分だ。現在、中学校で行われている生徒指導の徹底方式は、これに当たるのではなかろうか。

また(2)のしつけによる「規範感覚」の強化の方法は、大切に真に有効な方法かもしれないが、価値の多様化とよばれる現代では、この感覚を家庭においても学校においても、十分形成させることは難しそうである。

となると、いちばん有効で、多少の歳月はかかるものの実現可能なのは、(3)の「よき自己像の形成」をめざす方法かもしれない。すでに述べたように「よき自分」の自己像を守るために内なる「自己規制力」を働かせて、逸脱行動を回避させる方法である。

しかし「よき自分」という自己像、すなわちある種の自己価値観は、どうやって形成されるのだろうか。これは、少数の紙面では論じ切れないビッグなテーマなので、必要なら「モノグラフ・中学生の世界vol.12『中学生の自己像』(1972年刊)を参照していただくことにして、ここではさらに、非行耐性が低いとする、ネガティブな自己像を抱く生徒のプロフィールを見ていくことにしよう。



### 3. 自己不信群の心のうち

まず図14は、自己信頼度と他人からの評価の予想との関連を示したものである。「あなたは周囲から、どんな生徒だと思われているでしょう」とたずねて、自己像との関連を見ても、自己信頼群では9割が、自分は他人から、「とても」「まあ」まじめな生徒とみられているだろうと答えている。その割合は中間群ではやや減り、自己不信群ではさらに減って6割になってしまう。そして逆に、「少し」「かなり」つっぱった生徒とみられているだろうとの予想が4割にも達するようになる。すなわち「かくれ非行」ではなく、ある程度他からもわかる形の逸脱行動が、自己不信群には見いだされるようである。

さてこの3群をもっと顕著に分ける側面は、図15に示したように、「現在の気分」「人生観」「将来の見通し」などをめぐる彼らの心の動きにありそうだ。例えば、⑤「自分なんか生まれてこなければよかった」と思う者の割合は、「とても」「わりと」を含めると、自己信頼群では16%、中間群では20%だが、自己不信群ではそれが37%にもはね上がる。また④「自分の将来に、たいしていいことは

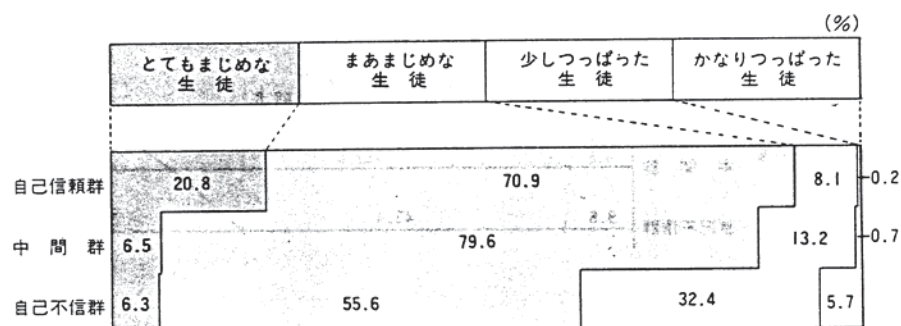
なさそうだ」については、同じく自己信頼群では18%だが、中間群では23%、自己不信群では33%にもなっている。ただし図は省略したが、比較的差のなかった項目も、ないではない。「よい友人がいて幸せだ」「体力には自信がある」の2項目は、グループ間の差がほとんどなかった。考えてみれば当然の結果かもしれないが。それらを除くすべての項目の反応は、自己不信群が他に比べて著しくグルミーであり、将来に対する希望をもたず、周囲からのまなごしの冷たさを感じ、自己価値観を抱けない様子を示している。

また図16に示したように、自己不信群は達成欲求が低く、努力を嫌う傾向も見いだされる。

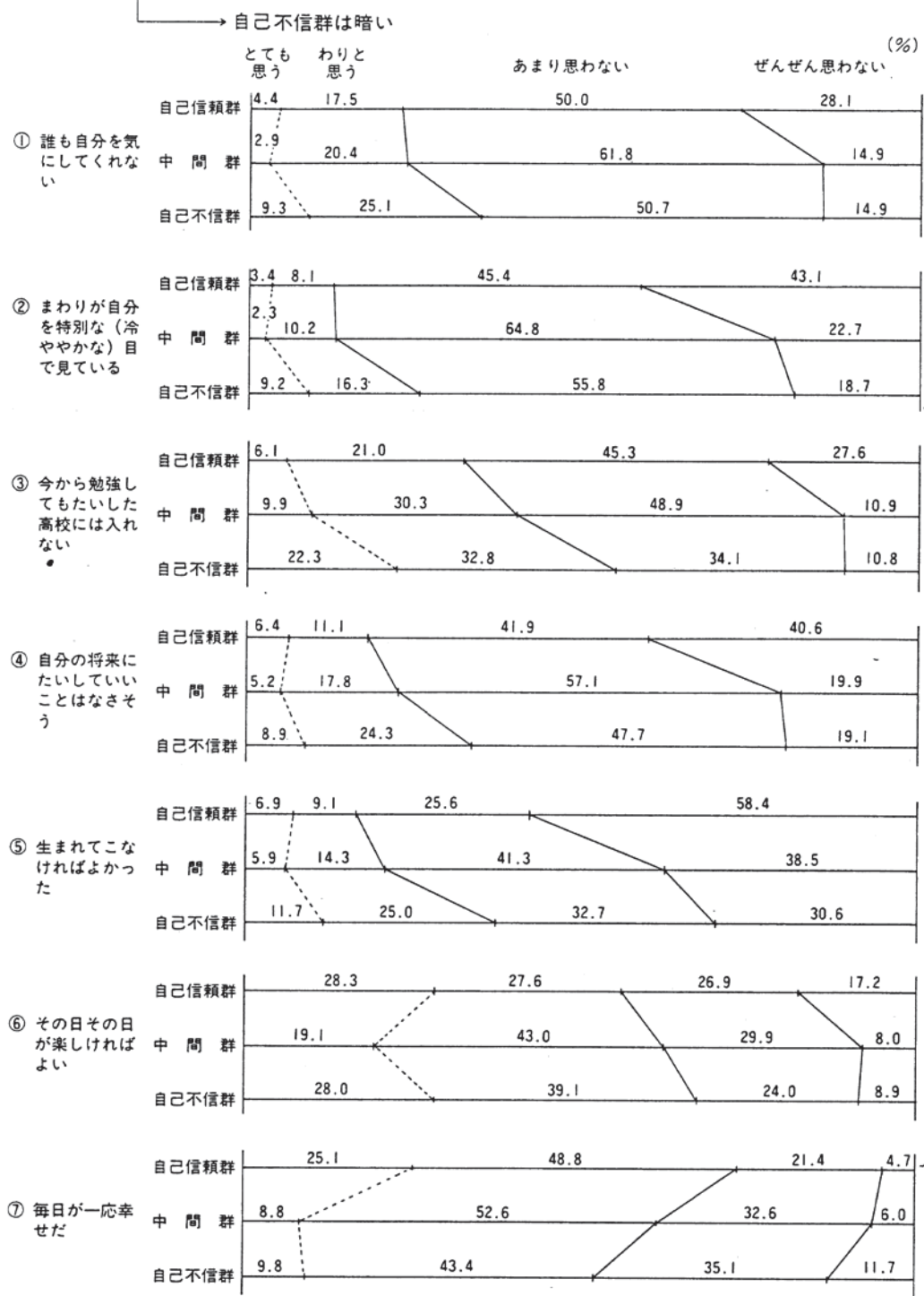
以上のように見てくると、自分に非行耐性がないと見ている者たちは、あらゆる側面において、大いに不幸で危険で、問題をもった者たちと言えそうだ。なんとかしてこうした否定的な自己像を生徒たちに形成させないことが、または、一たん形成された自己像をよりよきものへと修正してやるのが、われわれ親や教師に課せられた大きな課題ではなかろうか。

(図14) 非行耐性×他人からどう見られているか

→ 自己不信群はつっぱりと見られている



(図15) 現在の気分、人生観、将来像×非行耐性



(図16) 生き方×非行耐性

→ 自己不信群は努力を嫌う

～うんと努力して成功するか、努力はそこそこで平凡な幸せをつかむか～ (％)

	うんと努力して成功	できれば努力して成功	努力はほどほどで平凡な幸せ
自己信頼群	23.6	45.7	30.7
中間群	11.0	54.7	34.3
自己不信群	12.7	44.7	42.6

## 第V章 逸脱行動形成の背景



さて、生徒間に広がるこうした逸脱行動や規範感覚のくずれは、どういう条件のもとで形成されてきたのだろうか。その背景にはまず、規範からの逸脱にプレッシャーを加えなくなった今日の社会のあり方や、それどころか非行文化をむしろ現代的で新鮮な文化として、もてはやす社会的風潮なども、影響しているにちがいない。またもっと直接に、学校

や家庭など、彼らを取りまく環境から生まれてきている問題もあるはずだし、むしろそれぞれに個人的な条件や動機も存在するにちがいない。

そうした要因のうち本章では、直接彼らから聞き出したアンケートの内容から、とくに家庭や学校、友だち関係をめぐるデータをもとに、この問題に接近してみたいと考える。

### 1. 家庭で

最近の中学生は、それぞれの家庭の中で、どのように暮らしているのだろうか。非行少年たちの生まれる原因として、家庭環境や親子関係上の問題点が指摘されることも多いが、

一般の生徒たちの家庭への適応状態はどのようなものなのだろう。

まず図17は、家庭の居心地のよさをたずねた結果だ。「とても居心地がよい」はさすが

に3割を切るが、「まあ」を含めると居心地のよい家庭とする者は8割を超える。そのこと自体はけっこうなことのはずだが、ただし、青年期という発達段階上の位置を考えると、こんなに彼らにとって家庭が居心地よく快適だというのは、少しおかしいという気もする。

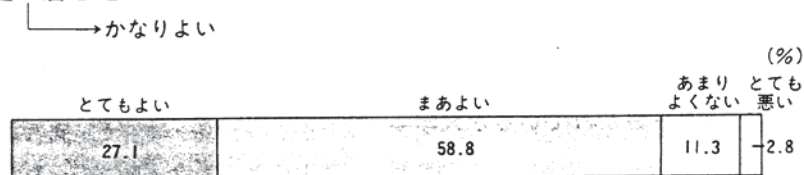
ただし図18に表れているように、やはり学年とともに、多少とも家庭は彼らにとって満足すべき場ではなくなっていく傾向が見てとれる。1年生では3分の1が「とても居心地がよい」場であった家庭は、2年生では4分の1しかそう答えなくなる。代わって「あまり(とても)居心地がよくない」者は、1年生に比べると3年生では多少増えている。

さて、そのように学年によって推移はするものの、全体として家庭はなぜそのように居心地のよい場なのだろうか。物質的な豊かさはむろんのこととして、図19に示されたように、両親のあり方が、昔に比べて大きく変わってきたためもあるのではなかろうか。発達段階からみると青年期は一生のうちで、いちばん親と対立する時期であるはずなのに、生

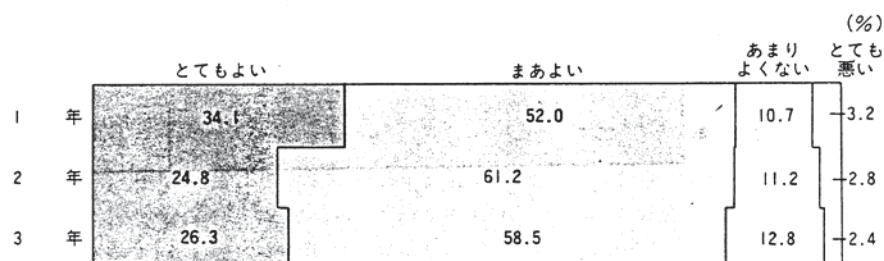
徒の4分の1は、父親(母親)に対して「ぜんぜん」不満がないし、「あまり」不満がないを含めると3分の2が、親に不満をもっていない。これでは居心地がよくて当然であろう。だから図20に示したように、学校のできごとを親に「よく話している」者は、「わりと話す」を含めると5割を超えてしまう。これを青年期における望ましい親子関係とみてよいか。それとも現代における、青年たちの自立や自我形成の遅れの一端とみた方がよいのか、微妙なところであろう。

もう一つ生徒たちの家庭内の適応を示すデータは、図21である。「家族の皆から好かれていますか」の問いに7割近くが「とても」「まあ」好かれていると答えている。しかし図22に示したように、1年生から2年生にかけて、「好かれている」が減り、逆に家族から「困ったもの」と思われているだろう、とする自己認知が多少増えている。この家族との間のギクシャクした関係は何を意味するのか。「困ったもの」の意味を追求してみたい気がする。

(図17) 家庭の居心地



(図18) 家庭の居心地×学年



(図19) 両親への不満

→ 少ない

		(%)			
		とても 不満がある	少し 不満がある	あまり 不満がない	ぜんぜん 不満がない
父	親	7.1	27.8	39.7	25.4
母	親	6.1	27.1	41.2	25.6

(図20) 両親に学校でのでき事を話すか

→ かなり話している

				(%)
毎日の ように 話す	わりと話す	あまり 話さない	ほとんど 話さない	
12.2	40.7	33.6	13.5	

(図21) 家族から好かれているか

→ かなり好かれている

				(%)
とても 好かれている	まあ好かれている	少し困ったもの と思われている	とても困った ものと思われ ている	
20.2	48.2	25.3	6.3	

(図22) 家族から好かれているか×学年

		(%)			
		とても 好かれている	まあ好かれている	少し困った ものと思わ れている	とても困った ものと思われ ている
1	年	27.5	48.5	17.8	6.2
2	年	16.9	49.1	27.2	6.8
3	年	23.2	44.4	27.6	4.8

## 2. 学校で

生徒たちの家庭での居心地のよさが明らかになったところで、学校に目を転じてみよう。家庭の場合と同じ質問をしてみたのが、図23である。「とてもよい」13%、「まあよい」52%と、合わせれば65%の生徒が居心地がよいと答えている。家庭の居心地のよさ(86%)に比べれば大幅におちるものの、しかし65%という数字は、「荒れる中学校」「偏差値の支配する教育」などという世間的な暗いイメージからすると、意外な数字という気もする。

こうした学校の居心地のよさに関する評価はどこからきたものだろう。その一つのカギは、「友人」の存在ではなかろうか。友人関係についてのデータは後で見えていくが、図24に示したように、「クラスの皆から好かれていますか」の質問に対して、「まあ」も含めれば7割が好かれていると答え、これは家族からの評価と比べても、僅少だが上回る数字である。同様の結果は図25にも見られ、現在の自分のクラスを「まあ」も含めると8割を超える者が、「好きなクラス」と答えているのである。

これに関連したデータは他にもある。図26は中学生生活全体について、「授業」と「それ以外(部活動・休み時間・文化祭・旅行)」に分けて、その「楽しさ——つまらなさ」をたずねてみたものである。かんじんの授業については、楽しいと答えた者は「わりと」を含めてもさすがに2割ほどだが、部活動を含めた

エクストラカリキュラム、角度を変えれば友人とつきあえる時間については、図が示すように、「わりと」を含めると6割が楽しいと答えている。すなわち学校を居心地がよいと評価する65%の数字は、「友人」の存在に助けられているものというのが、今日の中学校の姿なのではなかろうか。

したがって彼らの学校や教師に対する不満を探ってみると、図27に示したように、「とても不満がある」は17%、「少しある」が23%。合わせて4割もの生徒が不満をもっていることがわかる。とくにその不満の内容は、まず一番に「生徒指導のあり方」にあるらしいこともわかる。この点で学校側も、考えてみる必要がありそうだ。

しかし他方でわれわれは、この4割という「不満」の数字に、何かもの足りなさを感じてしまう。今の中学校はその中にかずかずの問題を抱えている。それは当事者の中から生みだされた問題というよりも、学校をとりまく今日の社会的諸条件からもたらされた部分が大きいのかもしれないが、とにかく現在の中学校が問題をもった制度であり、環境であることはたしかであろう。しかしその中において、しかも発達段階的には、人生でいちばん批判的精神を旺盛にもつ時期にある若者8%が、学校や先生に対して「ぜんぜん不満がない」、52%が「あまり不満がない」とは、いったいどうしたわけなのだろう。

(図23) 学校の居心地

→ 意外によい

とてもよい	まあよい	あまりよくない	とても悪い (%)
12.6	52.0	26.8	8.6

(図24) クラスで好かれているか

→ かなり好かれている

とても好かれている	まあ好かれている	あまり好かれていない	ぜんぜん好かれていない (%)
6.2	63.6	25.5	4.7

(図25) 好きなクラスか

→ 8割以上が好きなクラス

とても好き	わりと好き	まあまあ好き	なじめない	とてもいや (%)
10.9	31.9	42.3	8.8	6.1

(図26) 中学校生活の楽しさ

→ 楽しいのは授業以外

	とても・わりと楽しい	半分半分	どちらかといえば・とてもつまらない (%)
① 授業	3.3 18.9	47.2	20.8 9.8
② 部活動・休み時間 文化祭・旅行など	26.1	38.3	23.1 8.0 4.5

(図27) 教師への不満

→ 生徒指導に不満

とても不満	少し不満	あまりなし	ぜんぜんなし (%)
16.7	23.3	52.3	7.7

- ※ ○ 生徒指導 43.2 (%)
- (不満の内容) ○ 授業の進め方 15.6
- 学校規則 13.8
- 学校設備 6.2 ※自由回答を分類
- その他 36.2



### 3. 友人と

以上のように、生徒たちの中学校生活の楽しさを支えているのが「友人」であるらしいことはわかってきたが、友人というものは、人を支えることもあると同時に、人を減ぼす場合もある。とくに非行行動の形成には、非行グループとよばれる集団とのかかわりが、大きな働きをするとも言われる。ここではとくに、放課後の友人関係にまで、多少探索の手を伸ばしてみることにしよう。

まず親しい友人の有無から見ていこう。図28に示したように、「何でも話せる仲よしの友人」を1人以上もつ者は、全体の9割を超えており、内訳では、同じクラスに仲よしがいるのが53%。ちがうクラス37%と、けっこう身近に自分を支えてくれる仲間がいる様子が見いだされる。

では放課後の交友関係はどうだろう。もし非行グループと名づけるような、またはそれへと発展しそうな友人関係があるとしたら、それは放課後のつきあいの中に見いだされるにちがいない。むろん放課後にわたる友だちつきあいの大部分は、健康なものであるだろうが、われわれとしては、どこかに敵のシッポを探してみたいという気もする。

図29によれば、放課後外でつきあう友人をもつ者は、実に83%。数もけっこう多くて、4～5人以上いる者が66%にも達している。次にその友人の種類である。多くは同じ学校で知りあった友人だが、小学校時代の友人ともけっこうつきあいを続け、また塾で知りあった友だち、他校の友だちも一定の割合で含まれていることがわかる。

さてそれらの友人とのつきあいの場は、どこにあるのだろうか。表5に示したように、あらゆる場でつきあいが展開しており、中には家人が留守の部屋や、ゲームセンター、公園や空き地、デパートやお店など、ともすれば非行行動を誘発しやすい場にも、生徒たちが出

かけている様子がある。

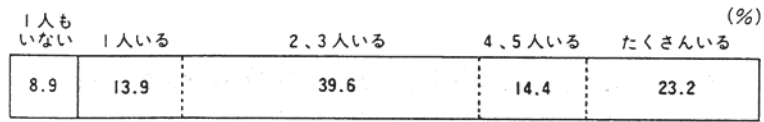
しかしこれだけでは、多少にせよ、そのグループが非行とかかわっているかどうか判定することはできないだろう。年に1、2度の旧交を暖めるクラス会だって、これに入ってしまうからである。それで次に、「放課後しょっちゅうつきあっているグループ」に限定してたずねてみたのが、図30である。放課後しょっちゅうつきあうグループをもっているのは、全体の3分の1。しかも、5人以上のグループが6割に達している。しかも多くは同性同学年（同中学）だが、男女混合集団(9%)や異年齢集団(12%)、他校もまじる集団(14%)、高校生や大学生、職業人をも含んだ集団(3%)など、このあたりになると、かなり危険な要素を含んだグループの気配もただよってくる。

また図31に掲げたように、学校でのつきあいと学校外のグループでのつきあいの楽しさの比較をさせると、大方は「同じくらい」だが、学校外のつきあいの方が楽しいとする者も、3割近くいるのである。

さてそうした放課後の学校の外でのつきあいに関して、親たちはどのくらい十分把握しているのだろうか。図32に示したように、その友だちをよく知っている親は、わずか4割にすぎない。「顔も名前もまったく知らない」という危険なケースが8%。おそらくこれは、よくない友だちとみていいだろう。次に「顔は知っているが、名前はほとんど知らない」14%も、あまり感心した友人ではなさそうだ。家にさそいに来たり、話しに来たら、ふつう名前ぐらひは、親子の間で話題にのぼるのではなかろうか。親や教師の知らない友人関係が、けっこう放課後に展開されている気配である。

(図28) 親しい友人の有無

→ 身近にいる



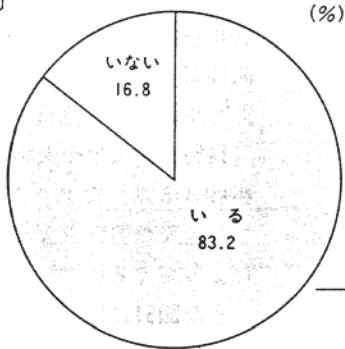
〔一番仲のよい友人は〕

① 同じクラス	52.8(%)
② ちがうクラス	37.3
③ ちがう学年	1.2
④ ちがう学校	8.7

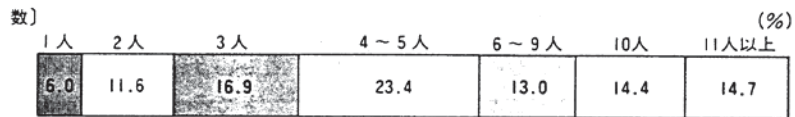
(図29) 放課後学校外でつきあう友人

→ けっこういる

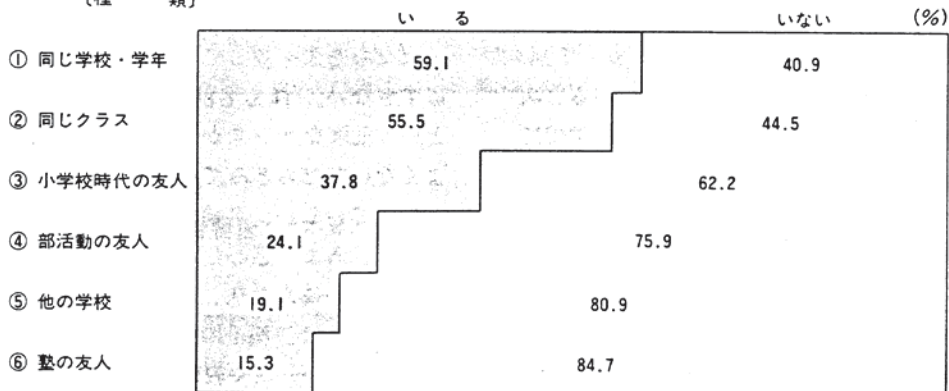
〔友人の有無〕



〔人



〔種 類〕

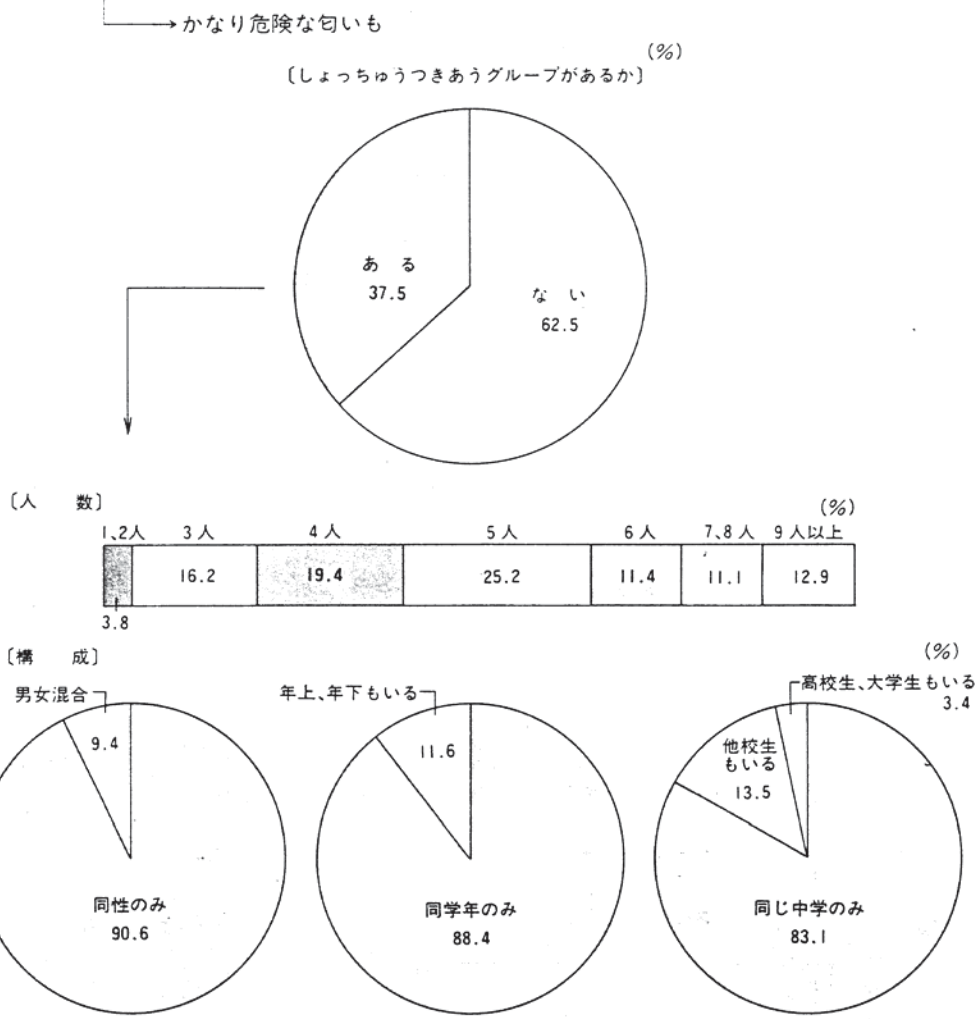


(表5) 友人とつきあう場所 (学校外)

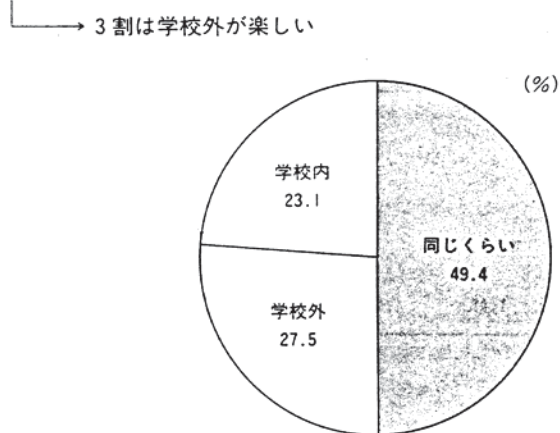
→ あらゆる場所で

場 所	%
家人がいる自分の家 (部屋)	56.2
家人がいる友人・先輩の家	52.8
デパートや店	50.0
祭・盆おどり・縁日など	44.1
公園・空き地	44.0
家人が留守の自分の家	35.1
家人が留守の友人・先輩の家	34.1
映画館・コンサート会場	28.1
他校の文化祭など	15.2
ゲームセンター	13.4
スーパー	10.2
喫茶店	7.4
友人や先輩が借りている部屋	1.3

(図30) 放課後学校外でよくつきあうグループ



(図31) 友だちづきあいの楽しさ—学校内と学校外(グループ)



(図32) 親は学校外でつきあう友人を知っているか

よく知っている親は4割

ほとんど知っている	半分くらいの人の名前を知っている	顔は知っているが名前はほとんど知らない	顔も名前もまったく知らない
40.3	38.3	13.6	7.8

(%)

## 4. 交友関係と親のしつけ

以上のようにデータの中には、非行へつながっても不思議のないような交友関係を暗示するものが、チラチラと見えかくれしているようにも思う。校内を一步出た後の子どものコントロールの責任は、むろん家庭にあると思われるが、この点に関して家庭のしつけのあり方はどうなっているのだろうか。

まず図33だが、学校から帰ったときに、家人はどのくらい家にいるのだろうか。子育ての一段落したところで、働きに出る母親も多い現状だが、図によれば帰ったとき、家には「たいてい誰かいる」は半分で、他は程度の差こそあれ、親たちの目のとどかない帰宅のしかたをしている者がけっこういることがわかる。しかも学年を追うにしたがって、それが増えていく様子もみられる(図34)。

そうした親の物理的不在の下では、放課後子どもが外出しようとしても、それをコントロールする者はいないわけだが、この問題をめぐるデータが表6である。放課後の外出を、彼らはどのくらい親たちの了解をえて、しているのだろうか。

おどろいたことには、表が示すように、24%の生徒は「親に言わなくてもまったく自由に外出できる」と答えており、44%は「行き先を言えば自由に」と答えている。帰宅後の外出が「ほとんど自由にならない」(2%)は少し異常だとしても、親子の間で外出先を確

認しあう必要があるだろうし、この年齢では、ときには親のコントロールも必要ではなかろうか。それがされているのは、30%しかないのはどうしてなのだろう。

では、この点について生徒たちはどう考えているのか。表7によれば、「中学生なら行き先は自由で、親に言う必要はない」が16%もいるのに、まずおどろかされる。この生徒たちの家庭でのしつけは、どうなっているのだろうか。「一応親に言って許してもらいたいだろう」は、わずか3分の1にすぎない。これでは親として無責任に子どもを放置していると言われても、しかたがないと思われる。

ではより危険度の高い「夜の外出」について見てみよう。表8に掲げたように、夜7時以降に友人宅へ遊びにいきたい場合を例にとると、「まったく自由」3%、「行き先を言えば自由」14%、合わせて17%の者が自由に出かけられると答えている。この数字を見てみると、いったいこれらの生徒の家庭のしつけは、どうなっているのだろうと思ってしまう。

次は門限について見てみることにしよう。夜、友人の家にいてよい時刻は、中学生ならせいぜい7時ぐらいまでというのが、ふつうの感覚ではなかろうか。図35を見ると、1年生ではさすがに7時頃までが9割だが、学年を追って時刻は遅くなり、3年生になると「夜

9時かそれ以降」が2割を超えてしまう。

こうした一部の家庭のしつけのいいかげんさは、表9の「外泊」についても言えそうだ。友人宅といえども、外泊を親が「簡単に許すだろう」4%、「友人の名を挙げればいつでも許すだろう」17%とは、あまりにも親の責任を放棄してしまった数字ではなかろうか。

同様に図36を見ていこう。①に示したように、「家につっぱった服装をした友人が来た」として、親が「あまり気にしないだろう」が17%もいるし、「あまりいい顔はしないが黙っているだろう」29%の数字も、子どもに親としてキチンとした態度をとれないダメ親ぶりを、指摘されているようなものではなから

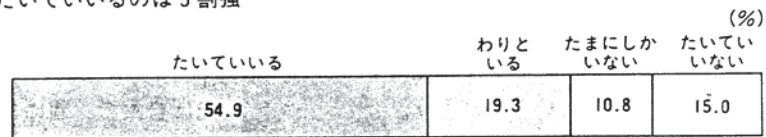
うか。

また②を見ると、「親の与えない高価な品物を持っている」のが見つかって「気づかないだろう」の6%は論外としても、「友だちに借りた」「もらった」「友だちから買った」と言えば納得するだろうが、42%もいるのはどうしたわけだろう。

さらに③「私服の交換」についても、「気づかない」10%、「誰と交換しているのか言えば納得するだろう」44%の数字は、同様にヒドイ数字である。しかもその数字は学年と共に増え、3年生では、3分の2の親が、これを注意しなくなる(図37)。

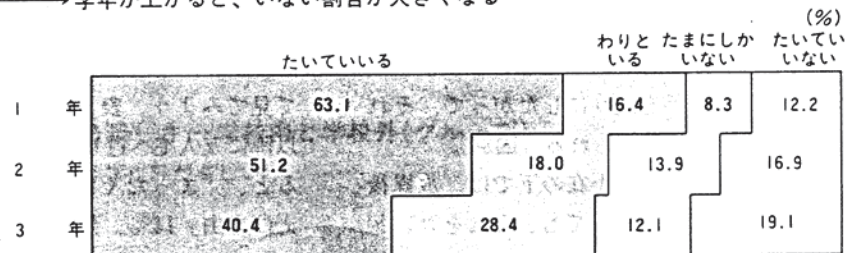
(図33) 帰宅時に家族がいるか

→ たいていいるのは5割強



(図34) 帰宅時に家族がいるか×学年

→ 学年が上がると、いない割合が大きくなる



(表6) 外出の自由度

→ 7割が自由

項目	(%)
親に言わなくてもまったく自由に出かけられる	23.9
行き先を言えば、自由に出かけられる	44.4
行き先によっては、許されないこともある	29.9
ほとんど、自由にならない	1.8

(表7) 外出についての意見

→ 「許してもらいべき」は3割

項目	(%)
中学生なら行き先は自由で親に言う必要はないと思う	15.8
中学生なら行き先を言えば、自由に出かけてよいと思う	50.7
中学生でも行き先を言って、一応許してもらいべきだろう	33.5

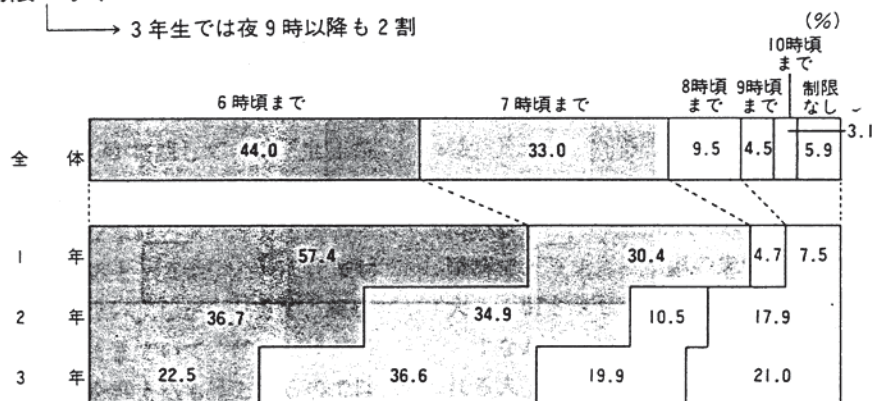
(表8) 夜の外出の自由度 (夜7時以降)

→ 甘すぎる親たち

項目	(%)
まったく自由に出かけられる	2.9
行き先を言えば、自由に出かけられる	14.0
ごく親しい友だちで、特別の理由があれば許される	63.1
まったく許されないだろう	20.0

(図35) 門限×学年

→ 3年生では夜9時以降も2割



(表9) 外泊～試験勉強のため友だちの家に泊まりたいと言ったら～

→わりと簡単に許される

項目	(%)
まったくだめだと思う	48.7
ごく親しい友だちの間なら、特別に許してくれると思う	30.4
友だちの名前や住所をはっきりさせれば、いつでも許してくれると思う	16.9
簡単に許してくれると思う	4.0

(図36) 交友・生活についての親の姿勢(生徒の推測)

→かなりルーズ

① もしあなたの家に、太いズボンや長いスカートをはいた(つっぱった服装をした)友だちが来たら

あまり 気にしない	いい顔はしないが 黙っている	あまりつきあわない よう注意される	絶対つきあわな いようきびしく 注意される (%)
16.5	28.7	40.2	14.6

② あなたが家で買ってもらっていない高い品物(たとえばラジカセや自転車)を持っていたら

あまり 気づかない	「友だちから借りた」 「もらった」「買った」 と言えば納得	きびしく注意され 返すように言われる (%)
6.3	42.1	51.6

③ 自分の私服と友だちの私服とを交換して着ていたら

あまり 気づかない	誰と交換しているか 言えば納得	きびしく注意され 返すように言われる (%)
10.3	43.6	46.1

(図37) 親の姿勢×学年

→学年が上がるほどルーズ

自分の私服と友だちの私服とを交換して着ていたら

	あまり 気づかない	誰と交換しているか 言えば納得	きびしく注意され 返すように言われる (%)
1年	8.0	35.4	56.6
2年	11.0	50.5	38.5
3年	15.1	53.0	31.9



## 5. 生徒たちの人間関係をめぐって

本章では、生徒たちの生活環境に接近してみたわけだが、とくに家庭のしつけのあり方が、大きくゆるんでいる層があることを見いだした。すでに見てきたような生徒たちの規範感覚のくずれや生活習慣のゆるみは（その全ての責めを家庭や家庭教育のあり方に帰すわけにはいかないとしても）、かなりの部分で、ルールのない家庭やけじめのつけられない親たちが増加してきていることに関連があるのではなからうか。人生のスタートは、まず家庭という集団ではじまる。小さいがこの集団の中に、一つの秩序やルールが確立されており、子どもがその成長のプロセスでそれを身につけ、そうしたルールを守るといった感覚を育てることができれば、地域や学校やより広い社会に出ることになってからも、ある程度は、きちんとした（大きくは逸脱しない）行動がとれるのではなからうか。そうした意味での家庭や家庭教育の重要性を再確認するとき、今日の家庭の中に、かなり多くの「問題家庭」が存在することは、たしかなようである。

ルーズでけじめのない家庭に育ち、社会に出ていくために必要な行動様式を身につけないうまま、からだだけ成長してしまった子どもたちが、生徒として学校という社会に入ってくる。「生徒」としてこれをいやおうなく引き上げざるをえない学校側が、いわば腕づくでこの小アニマルたちを抑えにかかろうとするのも、やむをえないことかもしれない、という気もする。はた目からすると、今日多くの中学で教師たちが格闘している「生徒規則」の徹底は、多分に疑問を感じる部分が多いのだが、このような家庭の状況を見てみると、とりあえずの対応策としては、これも仕方がないことかもしれない。しかし一方で、親が子どもを放任したまままでいて、学校だけが必死になって子どもを抑え込もうとするのでは、

学校や教師の努力も、ザルで水をすくう行為も同然ということになりそうだ。

さて最後に、さらにいくつかのデータをもとめて見てみよう。図38は、生徒をとりまく人間関係である。彼らが「わりと」「とても」うまくいっている人間関係と評価しているのは、

- ① 仲よしグループと(81%)
- ② 部活動の友人と(68%)
- ③ クラスの友人と(67%)
- ④ 母親と(67%)
- ⑤ 父親と(61%)
- ⑥ 部活動の顧問と(38%)
- ⑦ 担任と(34%)

という順位になっている。友人に続いて母親や父親が上位に上がってきていることは、ちょっと考えると、親子関係がうまくいっているほほえましい状況とも思えるが、子どもに甘いばかりで、きちんとした態度がとれないという、先に見た親たちの状況を思い浮かべると、この数字の意味もちがってくる。自分を自由にさせ、きびしいことを言わない親を子どもが歓迎するのは、あたり前のことである。親は子どもに嫌われたり反発されたりすることを覚悟の上で、きちんとした家庭教育をしていかなければならないのに。

しかし図39に見られるように、「もしあなたが非行化したとき、それを心配して立直りのためにあらゆる努力をしてくれる人は」とたずねられれば、生徒たちはまず一番に「母親」「父親」と答え、その数字は誰よりうまくいっているはずの「仲よしの友人」や身近にいる「担任の先生」、それがあつ程度専門の職務である「生活指導の先生」のいずれをも大きく引き離している点に、注目したい。

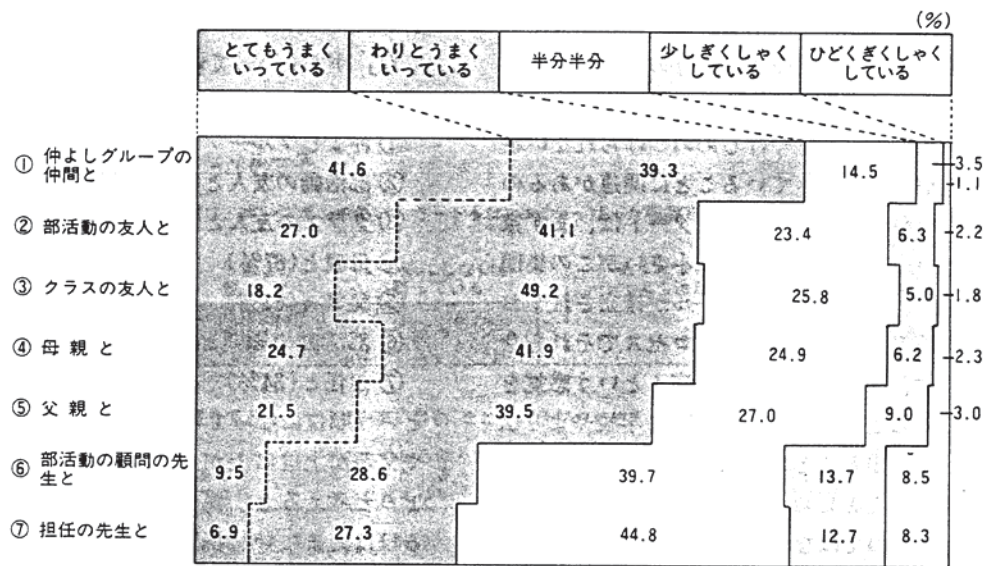
すなわち「誰より自分のことを心配してくれる人」という信頼を、子どもが親によせてい

る限り、親としてはその信頼にこたえて、子どもに必要なしつけをしていく責任があるので  
はなかろうか。たとえ一時的には反発され、  
親子の間に対立関係が生まれたとしても、そ  
れは後日必ずや、より一層強い愛情や信頼とな

って、子どもと親との間をつなぎかえすであ  
ろう。そうした意味で親たちは、子どもに対  
してもっと自信をもち、子育てにおける自ら  
の役割と責任とを果たしていくべきであろう。

(図38) 生徒の人間関係

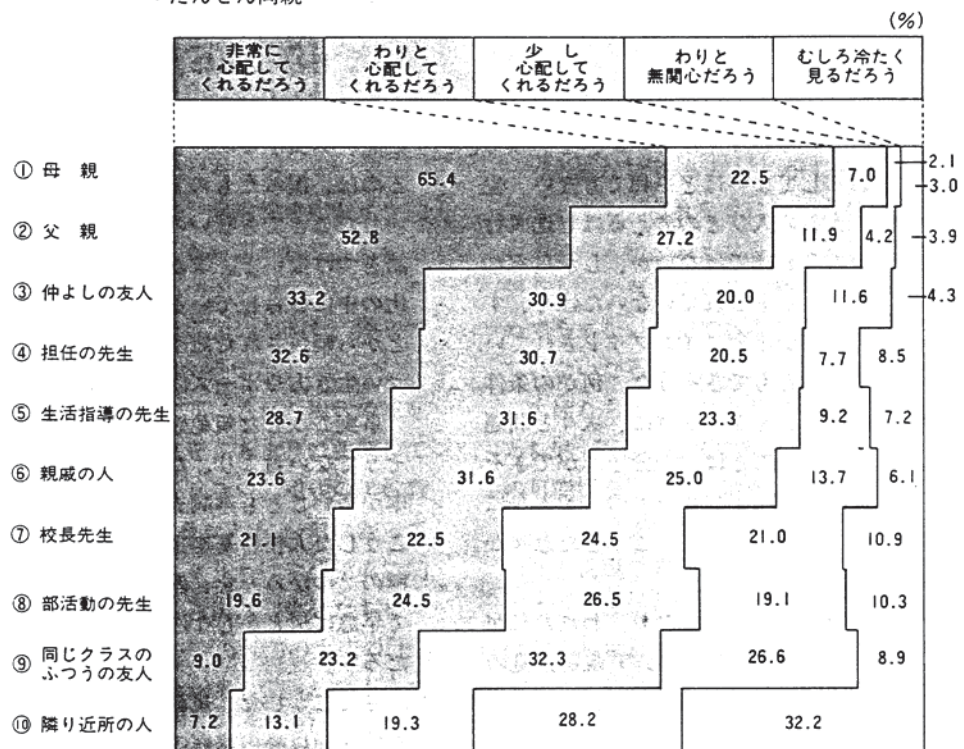
→ 友人と同じくらい両親とうまくいっている



\*数値は「入っていない」(③、⑥)「いない」(④、⑤)を除いて計算したもの。

(図39) 自分を心配してくれる人 ~もし、非行グループに入ったとしたら~

→ だんぜん両親



## 〔まとめに代えて〕



これまで見てきた「前非行」をめぐる数字のかずかずは、何をわれわれに示唆するのだろうか。

一口に言って現在の中学校は、世に言われるほど荒れているわけではないが、といて、胸をなでおろしてよいほど平和でもない。生徒たちは、大方の人びとの考えるほど逸脱行動の経験があるわけではないが、しかしそれはまだアウトプットされていないだけで、すでに多くの材料が十分にインプットされている、とみなすこともできそうだ。何かの条件が加われば、それをきっかけに、次々と問題が起こりはじめることは、十分予想ができそうだ。われわれが、本レポートのタイトルに「前非行」の語を使ったのも、こうした意味からのものである。

レポートをまとめ終わった今、われわれがとくに気がかりなことは、彼らの「規範感覚のくずれ」である。社会生活の中で、何が人として、してよいことで、何が悪いことなのか、という感覚をわれわれは人格の基底に十二分

にもっていないなければならないのだが、中学生たちの多くには、現在その感覚が十分ではない。むしろこれは、おとなの社会にも責任があって、人がまじめにひたむきに生きることを、嘲笑するかのような社会的雰囲気があるのは、困ったものである。われわれは、たいしたことでもないので、「マジで」などの語をつけないと、まともなことが言えない文化の中に暮らしているのである。むかし人びとから軽蔑された短小軽薄が、いまや最もイマイ生き方やポーズになってしまっている。

事実こうした規範感覚にくずれのある者は、そうでない者より、たしかに逸脱行動の体験率が多いことも本調査の中で見いだされた。こうした人格の基本部分に起こっているある種の「ゆがみ」を、教育にたずさわる側として早急に何とかしなければならないのは明白だろう。

さてこうした「規範感覚」は、何といても幼児期以降の家庭の雰囲気、家庭教育の中で形成される部分が多い。しかし本調査の

中で一端が表れていたように、今、子どもの「基本的生活習慣の形成」はきわめて不十分であり、家庭の「しつけ」そのものが、大きくゆるんできている印象をうける。子どもの社会化を適切に果たし得ない家庭が、次第に一般化しつつあるのだろうか。

子どもの人格形成に、家庭環境が重要な役割を果たす点は、古くから言われてきたことではあるが、改めてこのテーマについて、今後どうアプローチしたらよいかを、探っていく必要があるだろう。

しかしここで浮き彫りにされた現代の家庭のしつけのだらしなさを、あまりに強調して語ることは危険かもしれない。現代の学校教育の内容にも、問題は多々ある。一口に言って、現代の中学校の教育、とりわけ生徒指導に関して学校がとっている方法は、生徒たちをマスとして扱うだけで、一人ひとりの生徒の「個」にほとんど関心が払われていないかのようである。人間にとって、とくに若者にとって、その服装は最も単純な自己表現の手段である

のに、ワンポイントのソックス1つはくことが許されない。こんな国が世界広しといえどもどこにあると言うのだろうか。

この点を教師たちにたずねてみても、一様に「服装の乱れは心の乱れ」という言葉が返ってくるだけである。しかし幼くても未熟であっても、それなりに、一人ひとりの生徒が1つの人格を備えた存在であり、個性と主張をもった存在であり、個有の自己実現を求めてやまない存在であることを、学校は忘れていないだろうか。

生徒たちの一人ひとりの中に、自分が他人とちがう独自の存在であり、その中にいくつもの可能性を秘めたかけがえのない存在であるとの「自己価値観」を育てていくことこそ、生徒を逸脱や非行から守るベストの方策であることを確認し、そのために親や学校や社会はどうあらねばならないかを探っていくことこそ、今後のわれわれに与えられた課題であろう。